

## 新潟市地域包括ケアシステムに活かすソーシャルインクルージョンを実現する構造要因の検討 その2 -「実家の茶の間・紫竹」におけるつながりのあり方から-

小倉清子・桜沢志保<sup>1)</sup>、金谷光子・西川薫・杉本洋・大屋愛里<sup>2)</sup>、石上和男、高野晃輔<sup>3)</sup>、皆川璃子<sup>4)</sup>、遠藤和男<sup>5)</sup>、佐藤純子<sup>6)</sup>

- 1) 新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科 4年
- 2) 新潟医療福祉大学 看護学部
- 3) 新潟医療福祉大学 医療経営管理学部
- 4) 新潟医療福祉大学 医療経営管理学部 修士
- 5) 新潟医療福祉大学 健康科学部 健康栄養学科
- 6) 元新潟医療福祉大学 看護学部

【背景・目的】 昨今の日本における少子高齢化を乗り越える為に、国は「つながり」の再構築、すなわちソーシャルインクルージョンの重要性を唱えて来た。

昨年度、私達は新潟市における“実家の茶の間・紫竹”で他者を排除せず、かつプライバシーに踏み込まないコミュニティの構造要因を知るために、主宰者や参加している自治体職員、“その日の当番”を経験した人にインタビューを行った。その結果、本施設には、ソーシャルキャピタルが持つ負の側面、すなわち排外主義・自由の制限・平均化を解消するための【**仕掛け**】があることが分かった。

今年度は、本施設に参加している市民を対象にインタビューを行い、【**仕掛け**】が参加者に与える影響を明らかにすることを目的とした。本研究は、令和元年度新潟市医師会地域医療研究助成事業の助成を受けて行った。

### 【方法】

- 1) 研究デザイン  
質的記述的研究
- 2) 研究協力者および選定方法  
本研究の目的を書面と口頭で説明し同意の得られた女性5名を対象とした。
- 3) 研究期間  
研究期間は、倫理審査承認後から2020年3月まで。  
データ収集期間は、2019年7月～2019年8月まで。
- 4) データ収集方法と分析方法
  - (1) データ収集方法：面接時間と面接の場所  
1人30分から60分に亘り半構造化面接を行った。①かようになってきたきっかけ、②印象、③変化、④意味について5人中3名は一緒に行き、他の2名は1名ずつで行った。今回は、④研究協力者5名にとっての本“実家の茶の間・紫竹”の意味について述べる。
  - (2) 分析方法：研究者数人で意味が取れる最小単位でテーマに関する内容を要約し、類似性、相違性を比較・検討しながら抽象度を上げてサブカテゴリーを形成し、その後サブカテゴリーの内容をさらに抽象化して最終的にカ

テゴリーに分類した。

### 5) 倫理的配慮

研究にあたり同意した後であっても、研究を辞めることが出来ること、まためにあたりプライバシーを尊重すること、本研究内容を報告および公表することを伝え同意を得た。新潟医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】 以下、「」は語りを、[] はサブカテゴリーを、{} はカテゴリーを表す。

#### 1) 研究協力者の属性

研究協力者は女性5名で年齢は70歳～80歳、3世代同居は3名、同居家族は平均4.4人、本施設への参加日数は5か月から4年8か月であった。

2) 参加者にとっての本“実家の茶の間・紫竹”の意味は、[憩い・楽しみな場][自由に居られる場][ストレス解消の場][（ワンコインによる）助け合いの場][若者世代と同居することのむずかしさを語り合い心が晴れる場][自分のふるまい方を見つめ直す場][バランスの良い食事がある場][見習うべきスタッフの対応の良さがある場][主宰者の持つ理念が実る場]の9つのサブカテゴリーから、【**憩い**】【**助け合い**】【**自己肯定**】【**成熟**】という4つのカテゴリーが抽出された。

【考察】 社会福祉制度の高度な専門化により、業務の枠に収まらない人々（軽度認知症・ひきこもり・ワンコインでのちょっとした助け合いが必要な人・嫁姑問題等）を見過ごす傾向に国は警鐘を鳴らしている。すでに本施設では、参加者同士が500円で診療の送り迎え・簡単な家の修理等について、双方向で気兼ねなくやり取りをする関係が出来ていた。また、研究協力者は、2名を除いて3世代同居であったが、「若い人のリズムはすごい速く回っているもの。」「私たちは邪魔ってことはないけど、歳とったら…」など、若者世代の中に在る高齢者の思いに関する語りがあった。[若者世代と同居することのむずかしさを語り合い心が晴れる場]として「実家の茶の間・紫竹」は、同居している家族に気を遣わずにいられる【**憩い**】の場であり、かつ話すことで【**自己肯定**】できる場所でもあった。

ソーシャルインクルージョンを実現していくためには、30年度の研究結果のように、参加者自らが【**曖昧さに耐え**】【**自己決定できる**】力を養うということが重要である。今回、参加者の語りから抽出されたカテゴリー【**自己肯定**】【**成熟**】は、それが実現されていることを表していた。

【結論】 1. 主宰者やお当番さんによる【**仕掛け**】は、参加者に【**憩い**】・【**助け合い**】・【**自己肯定**】・【**成熟**】の意味を付与していた。

2. “実家の茶の間・紫竹”には、誰もが日常的な困りごとを発信でき、困りごとに対処できる人が、その都度引き受けていくという自由な役割意識が成立していた。